

# 難民がつくった国「邪馬台国」6

難民がつくった国「邪馬台国」その1 1—邪馬台国への道を直線距離で考える—

## 「周髀算経の一寸千里の法」

次に倭人伝の距離は直線距離を測定したものだと考えるとどうなるかについて検証してみます。3世紀に知られていた遠く離れた地点間の直線距離を測定する方法の一つは「一寸千里の法」です。先にも述べましたが、直線距離の測り方「一寸千里の法」とはどのような方法だったか詳しく見てみましょう。谷本茂氏が紹介した「周髀算経」によればこうです。

「ある場所で夏至の日、太陽が南中したとき八尺（193 c m）の棒を垂直に立てその影の長さを測る。すると影は一尺五寸（36.2 c m）になる。そしてさらに北へ千里行った場所で同じように夏至の日に棒の影の長さを測る。影の長さは一尺六寸（38.6 c m）になる。南北に千里離れた二つの地点では影の長さが一寸（2.4 c m）違うことになる。」（注：当時の1寸は2.4 c m）

これが「一寸千里の法」です。当時の人々は地球が丸いことは知りませんでした。ですが距離が千里離れた南北二地点では経験的に八尺の棒の影は一寸違うという知識を持っていたということでしょう。

この「一寸千里の法」によって正しい距離が測れるかどうか検証してみます。地球は丸いの南北に距離が離れている二地点で夏至の正午に影を測ればその緯度によって影の長さは変わります。たとえば北緯  $37.6^\circ$  のソウルで夏至に193 c m（八尺）の棒の影を測ると、計算上48.4 c m（20.2寸）くらいになります。同じく夏至の日に影の長さが2.4 c m（一寸）長くなる地点、すなわち影が50.7 c m（21.2寸）になる地点を探すとソウルの北約74 k m強の地点と

なります。これは棒を立てる地点の緯度によって決まるので、北緯 37° 付近ではどこでも同じことが言えます。

三国時代の人々が八尺の棒の影が 1 寸違えば 74 k m 強の距離があるという認識を持っていたことは大いにありそうです。ですからはるかに離れた地点の距離はこの方法を用いて計算していたと仮定しても良いのではないかと思います。問題はこの 74 k m 強を何里と認識していたかです。三国時代の里法では一里は 430 m 強だったので 74 k m 強は百七十里強にしかありません。少なくとも中国本土の人はこのように認識していたはずで

### 「一里 74m の短里法で説明できるか」

しかしこの距離を「周髀算経」は千里と言っています。そこで三国時代の周辺諸国では 74 k m を千里とする里法、すなわち 74 m を一里とする里法があったのではないかという仮説が生まれました。短里説と言います。「周髀算経」は何時書かれた書物なのかは正確には分かっていません。紀元前の書物だという説もあるようです。周の時代にはそういう里法があり、中国では里法が変わった後も周辺諸国でその里法が使われていたという仮説です。

しかし、もしそのような里法があったと仮定するともう一つ仮定を積み重ねなければなりません。それは中国の里法で使われる尺度の比率の問題です。中国では一般的にものを測る時の尺度として里、歩、尺、寸という単位が使われてきました。そして一里は 300 歩、一歩は 6 尺、一尺は 10 寸という比率で計算してきました。この比率で計算すると一里が 74 m なら、1 寸は 4 ミリ程度になります。これは実用にはならない長さと言えます。一寸は 2.4 c m のままで一里 74 m にするには一里を 300 歩ではなく 50 歩だったとすればつじつまは合います。そう言う里法があったと仮定するのが短里説です。しかし、そういう短里が使われていたという記録は見つかっていないのです。

では一里を 74 m とする短里法があったと仮定して、実際に一寸千里の法で各候補地間の距離がどうなるか測定してみましょう。いま、帯方郡の候補地サリインと狗邪韓国の候補地キメで夏至の正午に棒の影を測ったとします。するとサリインの影の長さ 21.6 寸とキメの影の長さ

16.7寸の差は4.9寸になります。先に述べたように影が1寸違えば千里の距離になるのですから、この2点間の距離はその里法からすれば四千九百里になります。(当時の測定力を考慮して百里単位で四捨五入) 同じように他の帯方郡候補地と狗邪韓国候補地の間の距離を全て計算してみると、残念ながらその距離が七千里強になるところはありません。数値は最小値三千五百里から最大値五千六百里の間になります。倭人伝の記述七千里の2分の1から5分の4です。(表1) この数値を見ると一里を74mとする周髀算経の里法はここでは使われていないと考えられます。

(表1) 帯方郡候補地と狗邪韓国候補地間の距離(1里74mとして試算した場合)

帯方郡の候補地	狗邪韓国の候補地	二点間の距離 (里)	二点間の距離 (km)
サリン	キメ	4900	362
	プサン	5000	373
	タデ	5600	415
ヘジュ	キメ	4100	304
	プサン	4300	315
	タデ	4800	357
ソウル外港	キメ	3500	257
	プサン	3600	268
	タデ	4200	310

同じようにして狗邪韓国候補の三地点と対馬国候補の三地点の間の距離を計算します。これらの地点間の距離を計算すると最小値二百里から最大値千六百里くらいまでの間の数値となります。その中でプサン—豊玉間だけが千里になり、距離が倭人伝の記述に合致します。(表2)

(表 2) 狗邪韓国候補地と対馬国候補地間の距離(1里74mとして試算した場合)

狗邪韓国の候補地	対馬国の候補地	二点間の距離(里)	二点間の距離(km)
キメ	サゴ	900	66
	トヨタマ	1200	92
	イズハラ	1500	112
プサン	サゴ	700	55
	トヨタマ	1100	81
	イズハラ	1400	100
タデ	サゴ	200	13
	トヨタマ	500	39
	イズハラ	800	58

つぎは対馬国候補地の三地点と一支国候補地の原ノ辻との距離です。この計算結果でも最小値五百里強から最大値千三百里強の数値が得られます。その中で千里に近い数値が出るのは豊玉一原の辻間の九百里、佐護一原の辻間の千三百里ですが、千里とは数値の乖離が大きすぎるようです。(表 3)

(表 3) 対馬国候補地と壹岐国間の距離 (1里74mとして試算した場合)

対馬国の候補地	壹岐国の候補地	二点間の距離(里)	二点間の距離(km)
サゴ	ハラノツジ	1300	94
トヨタマ		900	68
イズハラ		600	48

以上のように「一寸千里の法」で計算した場合、帯方郡—狗邪韓国の距離、狗邪韓国—対馬—壹岐の間の二つの海峡の距離とも倭人伝に記述された距離とはかなり違うのです。一致するのはプサン—豊玉間の千里だけです。倭人伝の距離が「一寸千里の法」を使い74kmを千里として計算されたものとは考えられないと結論づけていいでしょう。

### 「当時の里法一里430mで測る」

では他に直線距離を測る方法はないのでしょうか。「周髀算経」の伝えることでもう一つ重要なことは当時三角法の原理は広く知られていたということです。つまり「一寸千里の法」は三角法の原理を使った計算方法だからです。現在では人工衛星が遠く離れた2点間の距離を正確に測りますが、人工衛星が無かった時代までは遠く離れた2地点間の距離は三角法を使って求めていました。三国時代に中国や朝鮮半島を隅々まで三角法を使って精緻な測量をしていたというわけではありませんが、距離を測る必要がある時は三角法の原理を使って遠く離れた2地点間の距離を測ることはできたはずだということです。

ある地点Aから沖合にある島までの距離を測る方法について考えます。島と地点Aを結んだ線にたいし直角の方向に移動して地点Bに行きます。その時、地点A—B間の距離が測れることが前提です。地点Bで地点A—Bを結んだ線と地点Bと島を結んだ線との作る角度を測ります。この角度が $84.3^\circ$ であれば地点Aから島までの距離は地点A—B間の距離の十倍になります。つまり地点A—B間が十里あったとすれば地点Aと島間の距離は百里になる計算です。 $84.3^\circ$ は底辺一尺、高さ十尺の直角三角形の定規を木で作ればできる角度です。同じように角度が $78.7^\circ$ なら地点Aから島までの距離は地点A—B間の距離の5倍になります。角度が $45^\circ$ なら地点Aから島までの距離と地点A—B間の距離は同じです。底辺は1尺で高さを1尺、2尺…10尺と代えた定規をつくっておけば遠い距離を測るのも難しくはなかったはずです。

実際にプサンから対馬までの距離を測るとします。プサン港の東の背後に小山があります。この山に地点Aを設定し対馬の最北端に目印になる岬や山の頂上を決めます。そして地点Aと目印とを結ぶ線を確定します。その線に直角に西に十里(4.3km)行くともう一つの小山の

上に出ます。そこに地点Bを設定して上記の三角定規を使って地点Bと対馬島の北端が作る角度を測ると  $84.3^\circ$  より少し大きくなるはずで、これによりプサンから対馬島までの距離は約百里強（50 km強）だとわかります。この距離が韓半島から対馬島までの直線距離です。同じように対馬の南端付近で同じように十里（4.3 km）ほど離れたA、B二地点を設定し同じように測定すると壱岐の島までの距離も約百里強（50 km強）だとわかるのです。このように地点Aから地点Bが見渡せる場合は百里程度離れた場所ならその距離を知ることはできたと思われ、もちろんそれ以上離れた距離は正確には測れませんので百里ぐらいまでが限度でしょう。しかしプサンやタデから対馬の最も近い地点まで、対馬南端から壱岐まで、壱岐から九州北岸の末盧国までならおよそ 50 km、すなわち百里強の距離となりますから測ることはできたと考えられます。

帯方郡から狗邪韓国までも途中、途中の山頂の間を三角法で計測することはできたでしょう。帯方郡の候補地をサリン、ヘジュ、ソウル外港としてプサンまではそれぞれ 475 km（千百里）、433 km（千里）、329 km（七百里）となり、またサリン、ヘジュ、ソウル外港からタデまでは 490 km（千百里）、447 km（千里）345 km（八百里）となります。もちろん測った距離には「余里」が付く程度の精度です。

この数値を見て分かるように直線距離を計測した数値は倭人伝に記述された七千里、千里、千里にはなりません。ほとんどその 10 分の 1 程度です。しかし、計測した距離の中で比例的に妥当な数値、すなわち 7:1:1 になる組み合わせが無いかをしてみると、一組だけあります。帯方郡はソウル外港、現在のインチョン付近とし、狗邪韓国はプサンとし、その間を三角法により大雑把ながら測ったとすれば、約七百里になります。また、プサンの付近から三角法を使って対馬の北岸までの距離を測ると百里強になります。ただしこの場合キメからは対馬が直接は見通せないのだからプサンから測ったと考えます。さらに、対馬の南端付近から壱岐北端までの距離をやはり三角法で測り百里になるのです。この組み合わせであればその間の距離は 7:1:1 になります。とすれば倭人伝の七千里、千里、千里の記述はちょうど十倍にされているといえます。陳寿はこれらの距離をどう認識していたのでしょうか。

### 「陳寿の地図が想定される」

陳寿は倭人伝の中で「郡より倭に至は万二千余里」「その道理を計るにまさに会稽・東冶の東にあるべし」と述べています。このような記述は陳寿の手元に首都洛陽を中心とした中国の地図があり、韓半島や倭地も記載されていて初めて出来るものです。そしてその地図に邪馬台国へ行く行程も記されていたと考えます。ではその地図では帯方郡から狗邪韓国、対馬、壱岐までの距離をどう記載していたのでしょうか。著者は、それぞれ七百里、百里、百里とされ、邪馬台国までの距離は千二百里と記載されていたと考えます。なぜなら先にも書きましたように陳寿は邪馬台国が会稽東冶の東にあるとしているからです。会稽東冶が現在のどこにあたるかは議論があるのですが福建省から浙江省の範囲にあったとしてよいでしょう。北緯 30° 付近です。また、当時の首都洛陽から会稽東冶までは二千里余りであることは知られていたはずで、一方洛陽から帯方郡までは五千里以上あることも知られていたはずで、さらに東夷伝によれば帯方郡の南に韓地があり、韓地は方四千里としています。倭地はさらにその南だと認識していたはずで、帯方郡から万二千里としているのです。

また倭人伝の記述では帯方郡から倭地への行程は「循海岸水行乍南乍東」「亦南渡一海」「東南陸行五百里至伊都国」「南至投馬国」「南至邪馬台国」など東南から南へ向かったように記述してあります。帯方郡の東南の方向、万二千里先の地点は会稽の東の海上にはなりません。はるか南の方になります。すると倭地が会稽東冶の東という倭人伝の記述はおかしな記述だということになります。倭人伝にそう書いた陳寿がその矛盾に気が付かないはずはありません。つまり陳寿は実際には邪馬台国まで万二千里はないことが分かっていたと考えるのです。たぶん陳寿の地図にはほぼ現在の日本列島のあるところに倭地が書かれていたはずで、とすれば七千里、千里、千里ではなく、その十分の一の距離が書かれていたと考えるのが妥当です。帯方郡・狗邪韓国間の距離は七百余里、狗邪韓国・対馬国間が百余里、対馬国・一支国間が百余里という記載だったでしょう。しかし陳寿は倭人伝にその距離を十倍に記載しました。

## 「どうして十倍になったのか」

ではなぜ陳寿は地図の里数を十倍に記載したのでしょうか。中国史研究の岡田氏や孫栄健氏は、倭人伝の里数の記述は魏の將軍だった司馬懿の部下たちの報告に基づくものだとしています。その報告が魏の公文書に残されていたと考えられるというのです。司馬懿は卑弥呼が魏に使いを送った239年の前年、中国東北部に勢力を張っていた公孫淵という豪族を滅ぼし、公孫淵の支配下にあった中国東北部から韓半島、さらには倭地までを魏の領域とした將軍です。その時、帯方郡も魏の勢力下に入りました。帯方郡の使いとして倭地にやってきた梯儁や張政などは司馬懿の息のかかった武将や役人だったのです。その梯儁や張政など、邪馬台国に来た魏の軍人や役人の報告書が公文書として残っていて、次の晋の時代にその公文書に基づいて陳寿が倭人伝を記したという考えです。とすれば梯儁や張政がこの誇大な里数を報告していたことになり（測ったのが彼らだということではありません）。彼らが誇大な里数を報告した可能性があるのでしょうか。

孫栄健氏はその著「邪馬台国の全解決」の中で大変興味深い指摘をしています。実は、同じ三国志の魏書に面白い記述があるというのです。「破賊文書は、旧、一を以って十となす」（「魏書」十一卷「国淵伝」）という記述です。意味は「戦争で勝利したことを知らせる文書は、昔、戦果を十倍にして報告した」という意味です。孫栄健氏は、三国志の中から例を引いて、このことを指摘しています。三国志、魏書、武帝記に次の記述があります。「青州の黄巾衆（中略）冬、卒三十余万、男女百余万口の降を受ける。その精銳の者を収め、青州兵と号せしむ」これは「青州の黄巾族の三十余万人が死に、百余万が降参した。その精銳の者を集めて青州兵と名乗らせた」という意味ですが、この時、実際に死んだのは三万余で、降参したのも十万余であったとのこと。

孫栄健氏によれば、当時、戦に勝って都に凱旋するとき、凱旋パレードをしながら王宮まで行進するのが通例だったようで、その時、戦果を大きく横断幕や垂れ幕に書いてパレードをしたそうです。その横断幕のことを「露布」といい、そこには実際の戦果を十倍にして書くという習慣があったのです。つまり、露布に十万の敵を破ったと書いてあれば、実際は一万の敵を



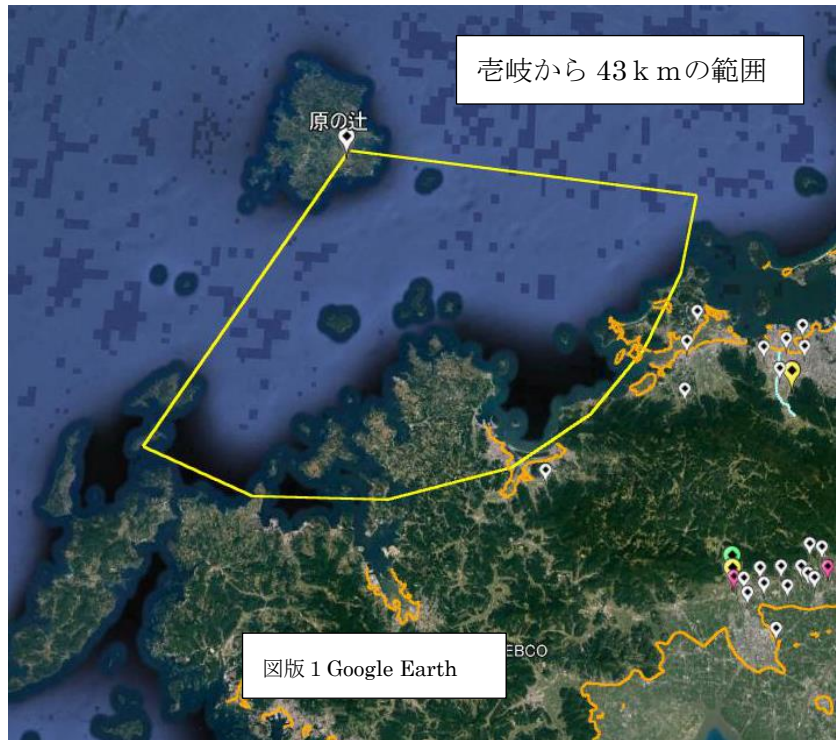
破ったということで、一般の民衆には大勝利と思わせながら「露布」の仕組みを知っている人には事実が伝わるという、なかなかうまい方法です。(孫栄健 1982)

そして、この露布の情報が、時として、魏の公式な記録に残り、陳寿が三国志を書くときの資料となったこともあったということです。青州における黄巾族の投降の記事はまさにそういう例です。陳寿はその記録が誇大になっていたことを知っていたとしても、時の皇帝の祖先の功績を記す公式文書を書き直すことはできなかったのです。

孫栄健氏によれば、邪馬台国の使いが魏の都、洛陽に着いたとき、この「露布」が使われたのではないかと考えられるということです。なぜなら、遙か絶遠の地から邪馬台国の使いがやってきたということは、皇帝の徳の高さを示すことであり、その使いを招致した将軍、司馬懿にとってはこの上ない戦果です。従って司馬懿が提出した報告書には韓地と倭地の距離やその他の数値が実際の十倍になっていた可能性があると思われます。と言うことは倭人伝には帯方郡から女王国まで万二千里としてあるのですから、実数は千二百里だったのではないかということです。つまり洛陽から帯方郡までの距離は既に知られている距離なのでそのまま実数の五千里とし、帯方郡から邪馬台国までの距離は実測した千二百里を十倍して「万二千里」とし、総距離数は「万七千里」と報告されたのではないのでしょうか。もちろんこれは 10 年前にライバルの曹真が万六千里彼方の大月氏の使者を連れてきたことに対抗したものです。もしかしたら邪馬台国の使い難升米らが洛陽の目抜き通りを宮殿に向かって歩くとき、魏の兵隊は「遙か万七千里のかなたから来た邪馬台国の使いである」というような横断幕を持って進んだのかもしれない。そして梯儁や張政の報告にも、倭地、韓地に関する報告は数値がすべて十倍になって報告されていたのではないかと思われるのです。もしそうであれば陳寿が倭人伝に誇大な距離を記した理由に納得がいきます。この仮説を「十倍説」と呼ぶことにします。この仮説に基づけば倭人伝の一里は実際の一里の 10 分の 1 すなわち 43m ぐらいとして読めばよいということになります。

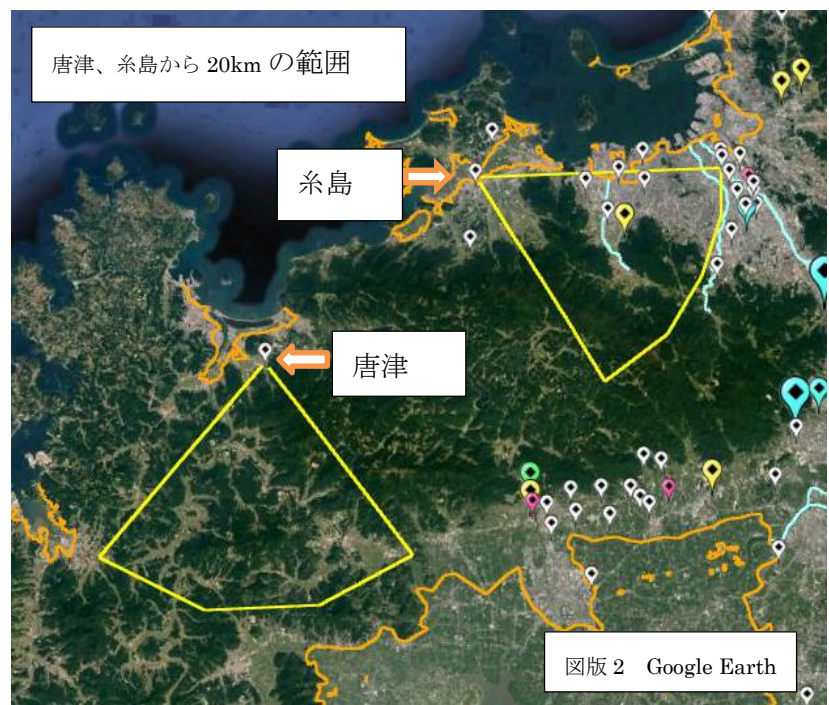
## 「一支国から先の行程」

では一支国から先の行程を「十倍説」で読み解けるでしょうか。倭人伝では一支国と末盧国の間も「千里」としています。しかも方向は何も書いていません。今までのように南に行くのではなさそうです。ところで、これまでの検討で倭人伝の「千里」は実際には百里=43 k m程度であると



仮定しています。壱岐から 43 k m の地点で良港があったところを九州北岸に捜します。その時この 43 k m は道のりではありません。壱岐の島のどこかの 2 地点から三角法で測って百里=43 k m と計算された港だと考えられます。

図版 1 を見ると壱岐から百里 (43 k m) の範囲にある良港は多くはありません。良港とは深い入り江があり、かつその付近に住居遺跡がある港です。地図を見ると壱岐から百里 (43 k m) の範囲にある入り江



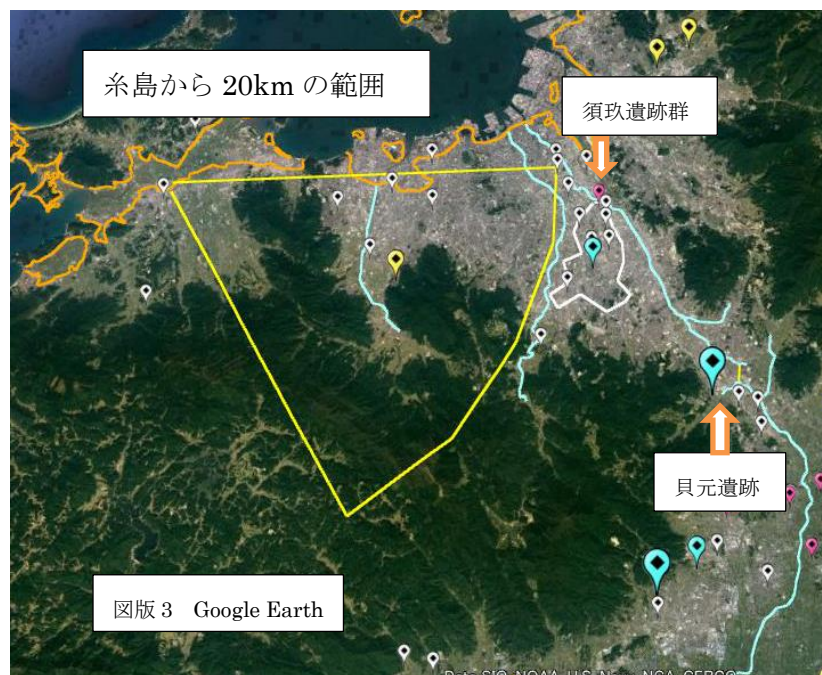
は三か所、西から伊万里湾、唐津湾、糸島です。そのうち伊万里湾には有力な住居遺跡が発見されていません。従って末盧国の候補は唐津湾か糸島ということになります。

次にそのどちらが末盧国にふさわしいのかを探るために倭人伝の記述に戻ってみます。倭人伝には「(末盧国から) 東南陸行五百里で伊都国に至る」とされています。十倍説で考えれば末盧国から五十里(20 km強)の所に伊都国があるということです。ではそれぞれの候補地から東南五十里(20 km強)の範囲を調べてみます。

図版2の黄色い扇状の線は唐津、糸島から東南へ20 kmの範囲を示したものです。また図版2のアイコンは10戸以上の住居跡が発見された弥生時代の遺跡です。その中で50戸以上の集落を黄色のアイコン、200戸以上の集落をグリーンのアイコン、300戸以上の集落をブルーのアイコンで示してあります。

唐津湾のどこを起点とするかで若干の差はありますが、唐津から20 kmの範囲にはほとんど住居遺跡は見られません。糸島から20 kmの範囲には福岡市の比恵遺跡群、春日市の須玖遺跡群が入ります。武雄には50戸未満の規模の集落しか発見されていませんが、須玖遺跡群には

50戸を超える集落遺跡が2か所発見されています。伊都国の候補地としては須玖遺跡群が有力に見えます。また須玖遺跡群を伊都国と考えるとその東南百里の所にある奴国の候補も出てきます。福岡県筑紫野市にある貝元遺跡です。須玖遺跡群の範囲の



取り方にもよりますが、伊都国候補の須玖遺跡群から5 km強の所にあり、東南百里という記

述にも合致します。この遺跡は弥生時代の住居跡が 300 戸以上も発見されており、日本列島最大の弥生の住居遺跡の一つです。二万户を擁したとされる奴国にふさわしい規模です。(図版 3)

また唐津を末盧国として糸島を伊都国とするのが定説化していますが、地図を見るとその説は成り立たないことが分かります。唐津から東南へ 20 k m 陸行して糸島にたどり着くことはできません。そもそも唐津から糸島に行く陸上の道は当時無かったと思われます。無理やり海岸の崖に沿った道をたどったとか、一旦東南に進んで佐賀市の方へ行き、筑紫山地を回り込んで糸島に行ったと考える人もいるかもしれませんが、それなら船で糸島まで行った方がずっと安全だったはずで、そんな道をわざわざたどる必要はないのです。この末盧国=唐津、伊都国=糸島説が定説化しているのが不思議です。伊都国を糸島とする説は音の類似から発想されたものと思われませんが、「伊都」は当時の音では「いた」に近い音だったと考えられ、須玖遺跡群に近い板付遺跡の音の方がより近い音だといえます。

### 「邪馬台国へ」

ではさらに先に進んでみましょう。倭人伝によれば伊都国の後、奴国、不弥国、投馬国を通過してその南の邪馬台国に至るとされています。榎一雄氏によれば、「伊都国からあとに記述された国は伊都国からそれぞれの国へ行く方向と距離が示されており邪馬台国は伊都国の南にあったと読むのが正しいと言う説が提示されています。(榎一雄 1960)

しかし前章でも述べたとおり、伊都国の後、奴国や不弥国を通る、通らないに関わらず、邪馬台国の場所を求めることはできます。それは「郡より女王国に至る万二千余里」という記述です。つまり十倍説では帯方郡から邪馬台国まで千二百里だと考えるので、帯方郡から狗邪韓国まで七百里、対馬国まで百里、一支国まで百里、末盧国まで百里、伊都国まで五十里と来ているわけですから既に千五十里来ていることになり、帯方郡から邪馬台国までの千二百里から引けば伊都国から邪馬台国までは残り百五十里ということになります。つまり二つの伊都国の候補地から実際の距離で百五十里=65 k mほどの所に邪馬台国があるはずです。



図版 4 は伊都国候補の須玖遺跡群から 65km の範囲を示した図です。須玖遺跡群から南に 65 km のあたりには熊本県山鹿市の方保田遺跡があります。弥生時代の住居跡が 100 戸以上発見されている大遺跡



です。邪馬台国の有力な候補です。南に熊本市の新御堂遺跡という巨大な住居遺跡があり狗奴国の候補地もそろっています。これまでの推論からすると方保田遺跡が唯一倭人伝の記述に合致する遺跡だということになります。最有力候補だとしてよいでしょうか。

実は一つ気になることがあります。方保田遺跡は筑後川流域の国々とはなれた別の勢力圏に属しているように見えることです。むしろその南にある熊本市の新御堂遺跡などと同じ熊本平野の勢力圏下にある遺跡と見えます。ここに邪馬台国があつて、山を越えた北の筑後平野や、福岡平野の国々を従えていたということには違和感を覚えるのです。

実は、ここでさらに検討しておかなければならないことがあります。今まで帯方郡から伊都国まで直線距離を測ったと考えられる距離を推定し、その距離を全部足して帯方郡から伊都国までの総距離 451 km としました。そして帯方郡から邪馬台国までの総距離 516 km から引いて伊都国から邪馬台国までの距離を 65 km と計算しました。その時倭人伝には記載されていないあるところの距離が抜けているのです。それは対馬島と壱岐島の島内の移動距離です。倭人伝には島内移動のことははっきりとは書いてありません。しかし対馬の記述の中に「道路は禽鹿の径の如し」という記述があり、島内を陸行したようにとれるのです。ではこの島内の移動距離があったとすればどれぐらいだったのでしょうか。それは次の記述から推し量れます。倭人伝は対馬の大きさについて「方四百里ばかり」とし、壱岐の大きさについては「方三百里ばかり」と記述しています。これは対馬について言えば東西南北それぞれ四百余里程だと言って

いるわけで、その距離が島内の移動距離だと考えるべきではないでしょうか。すると対馬、壱岐の二つの島を通過するのに七百里必要だと言っているということになります。十倍説で考え



れば七十里=30 k mになります。この間の距離が今までの計算に入っていないのです。この距離を計算に入れると、帯方郡から伊都国までは先ほど計算した千五里、すなわち 451 k m に七十里、すなわち 30 k m を合わせた千百二十里、すなわち 481 k m とするのが正しい距離だと考えるべきです。そうすると帯方郡より邪馬台国までは十倍説で千二百里、すなわち 516 k m とされているのですから残り八十里、すなわち 34 k m ということになります。(図版6) は伊都国候補の須玖遺跡群の大南遺跡から 34 k m の範囲です。

南の範囲を少し広く取りましたが、この図を見るとこの範囲には有力な遺跡が数多く含まれています。佐賀市周辺の遺跡群、鳥栖市周辺の遺跡群、吉野ヶ里、平塚遺跡群など、弥生の住居が 100 戸以上発見された遺跡が皆含まれます。伊都国から邪馬台国は南の方向とする倭人伝

に従えば、鳥栖市周辺の遺跡群は伊真南になります。これは鳥栖市にある内精遺跡と平原遺跡です。合わせると 500 戸近い集落が発見されている遺跡でやはり有力な邪馬台国候補と言えるでしょう。

次は平塚遺跡群です。方角が南と言うより東南になりますが、この遺跡群は弥生時代最大の集落遺跡です。平塚川添遺跡と平塚山の上遺跡という二つの遺跡が並んでおり、これらを合わせると、見つかっただけでも 450 戸以上の竪穴住居、150 戸以上の掘立柱建物がある巨大な集落遺跡です。邪馬台国が当時倭国で最大の国だったと考えるなら、平塚遺跡群は最有力候補です。

ただ、厳密に言うと鳥栖遺跡群や平塚遺跡群は伊都国候補の須玖遺跡群から八十里 = 34 k m も離れてはいません。しかし倭人伝の記載では伊都国までの里程には多くの所に余里が付いています。余里を考慮に入れば、伊都国から邪馬台国までは八十里もなかったともいえるので、鳥栖跡群や平塚遺跡群はやはり有力な邪馬台国候補に挙げてよいでしょう。

また、須玖遺跡の南にある吉野ヶ里遺跡も邪馬台国の候補にあげられます。吉野ヶ里は須玖遺跡群から南という方向もあっています。ただ吉野ヶ里遺跡自体からはそれほど多くの集落跡が発見されているわけではありません。吉野ヶ里はその周辺に大規模な集落遺跡がいくつもあるため、全体として邪馬台国であったと見なせば有力な候補です。距離も十分に八十里 = 34 k m あります。

さて倭人伝に記載された距離は「三角法」によって計算された距離だと仮定して検討してみると筑後平野にある巨大遺跡群にたどり着きました。候補が少なくとも 3 か所あり絞りきれませんが須玖遺跡からの距離と方向からすると邪馬台国はこの候補の中にあるとってよいと思います。

熊本平野の遺跡はやはり狗奴国の遺跡だとした方がよいのではないのでしょうか。

「邪馬台国をどこで考えるか」

以上倭人伝の距離の記述を①「道のりをきちんと測った結果が記してある」と仮定した場合と②「三角法などを用いて計算で出した距離を司馬懿の功名のため十倍にして記録された」とした場合の二つの仮定をもとに検討してきました。①の仮定からは大分県竹田市にある石井入口遺跡が最も有力な候補になることが導き出されました。今まであまり議論されなかった大分県の奥地に候補地があるという結論は大分県に住む著者にとっても思いがけないものでしたが、改めて調べてみると大分県の大野川や大分川の上流には弥生時代の巨大な集落遺跡がいくつも存在し、福岡県、佐賀県にまたがる、今まで邪馬台国九州説の本命とされてきた地域に劣らない弥生時代の人口密集地だったことが判明しました。しかもこの検証は倭人伝の記述に矛盾するところが少なく極めて魅力的な仮説だと言えます。ただこの仮説で導き出した一里 130mという仮定はなぜ 130mを一里としたのかの理由づけができません。地図をたどってみるとそう考えざるを得ないと言うだけです。当時 430m強だったと考えられる一里の 3分の1を一里とする里法があったのだと仮定するいわゆる「短里説」を採用するくらいしか理由づけができないのが難点です。

もう一つの仮説②に基づく検証では、当時の人口密集地で博多湾に面した福岡平野、その南の筑後平野の巨大集落遺跡が候補となることが判明し、ある意味ではほっとする仮説です。しかも倭人伝の距離は当時の一里の 10分の1に記載されていると仮定する理由づけも明確になりますので著者としては納得性の高い仮説だと考えます。どちらがより優れた仮説なのかを考えた時、結論から言うと邪馬台国は筑後平野の人口密集地にあったと考える方が自然だと考えます。中でも「平塚川添遺跡、平塚山の上遺跡の両遺跡」「鳥栖市の牛原、原田、内精遺跡」「吉野ヶ里遺跡と周辺の住居遺跡」の三か所の遺跡が邪馬台国の候補として有望だと考えます。遺跡の分布地図を作製してみると、弥生時代末期には福岡平野から筑後平野にまたがる地域に、最も濃密に集落遺跡が分布し人口が集中していたと考えられ、その中にいくつもの大規模集落があったことが分かります。これらの集落はたぶん吉野ヶ里遺跡のように環壕と城柵に囲まれた中核都市部を持ち、その周辺の集落を支配していたのだと考えられます。これらが倭人伝に記された国々だったろうと考えます。大分県の大野川流域に大規模集落があったことは確



かですが、その地域の小規模集落は福岡平野や筑後平野北部ほどの数ではなく、総人口からすればやはり有力な国は福岡平野から筑後平野北部の大集落だったとするのが自然です。従って邪馬台国は筑後平野の大規模集落のどこかにあったと考えるのが最も妥当な結論であろうと考えられます。

またもし大野川上流に邪馬台国があったとしたら狗奴国の候補が見当たらなくなります。狗奴国は邪馬台国の南にあった国とされていますが、大野川上流域の南は九州山地の真ただ中になり、大きな集落があったとは思われません。もっと南まで範囲を広げても宮崎県、鹿児島県には大規模な弥生時代の集落遺跡は発見されていません。しかし、邪馬台国を筑後平野だとすれば、その南の熊本県には大規模な集落遺跡が発見されています。熊本市の新御堂遺跡です。実はこの新御堂遺跡は、弥生時代の九州の遺跡の中で、一か所から発見された住居跡の数が最多の遺跡なのです。また山鹿の方保田遺跡も大規模な遺跡です。また熊本市の周辺からは中規模の集落遺跡が多数発見されており、この地域に有力な国があったことは否めないと思います。狗奴国の候補としておかしくありません。その意味からも邪馬台国は筑後平野にあったとする方が自然です。

### 「邪馬台国が近畿地方にあった可能性はない」

以上の考察で邪馬台国は九州の大分県、福岡県、佐賀県にあった可能性が極めて高いと言ってよいと考えます。またこの結論は安本氏の提唱するベイズの理論から導かれた「邪馬台国は99.9%福岡県にある」という結論にも一致します。考察の前提は倭人伝の距離、面積、人口などの数値がでたらめなものでなく、何らかの形で当時の状況を反映していると考えたことでした。そしてこの前提を疑うなら邪馬台国の研究そのものを否定することになるともいえます。現存している倭人伝の記述が実際の地形などと合わないのは事実です。それを中国人が陰陽五行に基づく良い数値を使ったとか、倭人が嘘を教えたとか、中国人は話があげさとか、具体的根拠のない理由に基づいて倭人伝の記述を疑う議論があります。そういう議論をするなら、倭人伝の記述のどこが正しくてどこが間違っているか分からなくなり、結局邪馬台国がどこにあ

るかを探求することは無意味だということになります。実際多くの研究者がその立場をとって邪馬台国を倭人伝から探るのをあきらめているのも事実です。しかし、倭人伝は中国の王朝が正史とした歴史書の一部です。後の時代に編纂された正史はほとんど倭人伝を踏襲した内容になっています。つまり倭人伝は後の時代の史官たちにとってもでたらめな資料だとは思われていなかったものです。また、倭人伝の記述の元資料は梯儻ら魏の役人の報告に基づくものと考えられ、これらの役人が全くのでたらめを報告していたとは考えられません。彼らの後にもたくさん魏や、晋の役人が邪馬台国を訪れているようですので、いいかげんな行程報告をすれば彼らの信用にかかわったでしょう。ですから、倭人伝に記述された距離、面積、人口などの数値は全くのでたらめではなく、倭国に赴いた魏の役人によって何らかの意図を持って誇大に報告されたと考えるべきです。その報告に基づいて地図が作られ、陳寿はその地図によって倭人伝を書いたと考えられます。こういった考えに基づき、倭人伝の誇大里程を考察した結果、著者は上記の結論に辿り着いたわけです。

そして倭人伝に記述された距離が全くのでたらめでなく、誇大に書かれてはいるが実際の距離を反映しているとすれば、邪馬台国は北部九州にあったと考えざるを得ず、到底近畿にあったという仮説は成り立ちません。近畿説が成り立つためには「今ある倭人伝が偽書で本当は別の倭人伝があり、そこには近畿に邪馬台国があると読める距離が書かれている」「現在発掘されている弥生時代の住居遺跡は当時の人口の分布を反映しているのではなく、住居跡はこれからもっと発見され近畿地方にもっと多くの人口があったことが示される」という二つの前提を置かないとなりません。この前提は実際には成り立つことはなさそうです。従って論理的でかつ合理的な方法で倭人伝を読み解きながら邪馬台国が近畿にあったという結論に至ることはできないでしょう。従って著者は倭人伝に記述された邪馬台国は北部九州にあったのであり、絶対近畿地方にあったのではないと断言したいと思います。

## 参考文献

- 石原道博編訳 (1991) 『魏志倭人伝 他三篇』 岩波文庫
- 孫栄健 (2007) 『邪馬台国の全解決』 ロッコウブックス
- 岡田英弘 (1977) 『倭国の時代』 文芸春秋
- 岡田英弘 (2008) 『日本史の誕生』 ちくま文庫
- 岡田英弘 (1991) 『倭国』 中公新書
- 森浩一企画 橘昌信 (1995) 『日本の古代遺跡 49 大分』 保育社
- 森浩一企画 渡辺正気 (1996) 『日本の古代遺跡 34 福岡県』

## 参考資料

遺跡ウォーカーβ [www.isekiwalker.com](http://www.isekiwalker.com)

地点間の距離はグーグルアースの距離測定による。